

創刊
準備号
5

2017年3月19日発行

福祉と介護のミニコミ誌

ふいねーず



(画) amor amigo)

Topic

特別寄稿 生活支援サービス事業推進のためのガイドライン
連載 心地よい関係性のバランス
起業・就労・支援の間で… (最終回)
Information 福祉・介護・まちづくり等のイベント情報欄

特別寄稿 生活支援サービス事業 推進のための ガイドライン (1)

山越孝浩

地域包括ケアシステムを構築

するための基本的な素地

(1) 主人公は住民であり、注目

すべきは「生活」

少子高齢化は、地域での暮らしに大きな変化をもたらす。高齢になると他人の援助がないと生活ができない人が一定割合出てくる。超高齢社会とはこれらの高齢者が増えるということであり、少子化は高齢者を支える人数が減り、負担が増えるということである。介護保険では、高齢者の「尊厳の保持」「自立生活の支援」を目的としている。「尊厳の保持」は、高齢者自らの意思に基づいた生活を維持できるように、本人の自己決定

を尊重することによってはじめて可能となる。

介護の問題は介護が必要な人や介護している家族・介護者だけの問題ではない。歳を重ねていく中で病気のリスクは増え、誰もが支援を必要とする可能性があり、自分だけは大丈夫と言うことは決して言えないのである。だからこそ、今は元気な高齢者でも、支援を必要とする高齢者でも、その家族でも「明日は我が身」という身近な課題なのである。よって、いつ何時、どのような状態になるかわからないからこそ、すべての住民が自分自身の今後のために、どこで、どのように暮らしたいのかを考えることが重要である。

自分が住みたいまちをつくるためには、他の誰でもない自らが、自らの生活環境を良くしていくため、自分自身で考え、行動するという主体的な意識が重要になる。主体的とは、ないものを要求する活動や新しい制度やサービスを役所に作ってもらうという考え方はなく、すでに今あるものや、うまく力を発揮できていない地域の

資源や人を互いに活かし活かされるような知恵や工夫を出し合う関わりが、主体的に関わることなのではなからうか。

個々の地域にあるニーズ（困りごとなど）を把握しないままサービスが作られても、支援の意味やサービスの必要性が理解されていないため、十分に機能が発揮されない。多くの自治体では、介護保険事業計画で、入所施設中心の政策を推進してきた。これは地域において「施設に入りたい」施設が必要」との声を反映させてきたものであるが、実際は、自宅や地域で暮らし続けたいにもかかわらず、施設に入りたと言わざるを得ない環境しかなかったからではなからうか。在宅サービスの不足である。その経験から第4期の計画からは「施設に入らざるを得ない選択」だけではなく、自宅や住み慣れた地域で住み続けることもできるように在宅サービスの充実を図って選択肢を増やしてきたのである。その結果、自宅や地域で暮らすための課題があることも明らかになってきた。その課題は、

制度が良くないとか行政サービスがないと言ったものではなく、まずは生活を主体としてみた時の課題である。

高齢になり、人の手助けが必要になった時や、これまでのように自分一人の力では解決することができなくなったときなど、これまで元気なときにできていた暮らしができなくなったことへの課題である。

例えば、電球を変えることができないう。重たい買い物が行けない。三度の食事の準備ができない。外出する機会や近隣との付き合いが減り、気が付くと数日誰とも話をしていないなど、生活を送る中でのちよつとした不自由や困りごとなどである。

病気になって、医療が必要になれば医療サービス、介護が必要になれば介護サービスと言ったものは、その出来事の困りごとにしかな作用してこなかった。しかし、病気が生活の一部であり、病気が生活ではなく、介護が生活の一部に病

気や介護があるのである。だからこそ、これまでの介護サービスではできないことだけを抽出しそのことを中心に、もしくはそのこと

のみに対して援助を行ってきた。そのため介護サービスで補うことができない生活の困りごとが増えてきたとき、自宅で生活したいと望んでもあきらめてしまうことも多くあった。これは介護が必要な

人だけではなく、元気な高齢者であつても、心身の衰えや、病気の治療、近隣との付き合いの減少による孤立感など、様々な不安を抱えている可能性が高く、こういった不安感が、心身に変化を生じた際に自宅での生活をあきらめてしまふ一因となっているケースも少なくない。

これまで何気なく送っていた生活が年齢とともに不自由になり、できないことが増えていくことは自然なことのように思える。しかし、その不自由なことやできないことは本人にとつては非常に不便であるとともに、これから先どうなるのかと言った不安にもつながるのである。そしてその不安は心

身ともに悪い影響を与える大きな要因となる。

身体障害や衰えによりできないことを生活の一部分から切り取つて、機能を評価するのではなく、生活に合わせた支援や役割作りなどの関与がとて重要であることから「主人公は住民であり、注目すべきは『生活』」である。

(2) 制度や事業から本人を見ない、あてはめない

介護保険制度が施行され介護保険事業がスタートすると、事業を行うことやサービスを提供することが目的となつてしまふというケースが増えてきた。これは、当初の目的の「本人を支える」ことから状態像を特定し、介護保険サービスの利用につながるかどうかだけで利用する人を探すことに目的が入れ替わり、事業を利用してもらつたためのサービスになつてしまつたと言える。例えば、在宅支給限度額管理を優先したサービスの当て込みや、友人に会いに行くために通所系サービスを利用するといったことである。また、本

人の発言力が小さいと発言力の大きなサービス提供事業者や家族・介護者等の周囲の言葉が優先されてしまい、本人は施設やグループホームなどに入所を希望していかくとも周囲の困りごとが優先されて入居に至るケースもでてくる。制度や事業は、本人の自立した生活や自己実現のためのツール(道具)である。しかし、制度や事業が始まると、支えるべき本人よりも、担い手であるほうの事情や理屈が優先されてしまい、サービスに本人の生活を合わせることに当然のこととして推し進められていった。その結果として担い手の都合により、本人への支援の量や質などが決まってしまう、そのことが常態化してしまうこともある。

これまでのこのような経緯を振り返り、真ん中に据えるべきは「本人」からであり、すべての支援は本人発で始まることが重要である。

(3) 本人の「声」を形にする
(代弁機能含む)

本人の声を形にするということは、本人の言っていることをそのまま受け取るのではなく、その発している言葉や表情、しぐさ等をサインやシグナルと捉え、潜在的な思い(ニーズ)を見据えることが大事なことである。

例えば目の前の人が「死にたい」と言う言葉を発したとしよう。その時「この人は死にたいのだ」と単純に考えないだろう。「死にたい」ほど「つらい」「悲しい」「さびしい」「恥ずかしい」などといったことを思い巡らすのではないだろうか。

その言葉にならない思いが潜在的な思い(ニーズ)であり本人も気が付いていない無意識の思い(ニーズ)なのである。

口に出すことすべてが「本音」ではない。自分が思っていることと正反対のことを言うこともあれば、周囲に遠慮をして自分の意見ではないことを言う、伝えたい言葉が思いつかず、ニュアンスの違う言葉で表現することもあるだろう。また、言葉にすることで、本当に伝えたかったことが言葉で伝

連載

心地よい関係性のバランス

第17回 「見えるもの」と「見えないもの」

感じる

「見えるもの」と「見えないもの」 「暖かいかどうか」くらいは感じについて考えることができる。でも、これだけ自閉症の人たちは「見えないもの」を理解することが苦手だ。逆に言えば、「見えないもの」を実感するというのは、考えてみると不思議な話なのだが、私には見えなくても疑いようもなく、そこにあるものを実感することができる。たとえば「時間」。それから「友情」「愛情」「信頼関係」。すべて、直接見ることができなくても、感じることはできなくても、感じることはできる。これは、特殊能力ではなく普通のことなのだが、それを感じる人が難しい人たちと関わっていると、感じる事ができなくなる。普通のことなのに、

「ちょっと待ってね」の「ちょっと」とか、「今日は暖かいね」の「暖かい」も、別に目に見えるわけではないけれど、感じる事ができる。時計がなくても、時間が過ぎていく感覚はあるし、

温度計で気温が示されなくても「暖かいかどうか」くらいは感じることができる。でも、これだけ考えてみれば不思議な話で、北海道旭川に住む私たちにとって、真冬のマイナス5度は「暖かい」と感じられるが、マイナス5度は暖かいかと聞かれたらきつとそれは「寒い」の範疇に入るものだと思う。見えないうえに、時と場合によって同じものに対して、まったく逆を示す言葉を使って表現することさえある事柄に、私たちは何の疑問も混乱もなく納得して、理解し合って、共感できるなんて、奇跡的なことだと思う。が、しかし、これもまた奇跡的なことではなく、普通のことなのだ。

見える事柄だけの世界
頭の中のしくみは本当に不思議だ。世の中のすべての事柄を「見えるもの」で説明しようと思うととても難しい。「見えないもの」

えていることとは別なことだったと気が付くこともある。それほど言葉で発している表現は、そのことと自体がすべてではなく、隠れた思い（ニーズ）があるのである。一方、思いを受け取る専門職側は社会通念、道義などの世間の人が一般的に考えると思われる常識というフィルターを通して聞くのである。それに付け加え、自身の経験や専門家としての思い（ニーズ）や考えからも、言葉を捉えるのである。

このことは、本人が発している言葉は、受け手の常識や知識、社会性において受け取り方がずいぶんと違う可能性があるということである。だからこそ、本人の言葉の意味をそのまま鵜呑みにするのはなく、その発言の背景や思いの言い換えやおうむ返しに聞き直したりして本人に確認や了解を取りつつ、本人が伝えたいと思われるものを表す作業が必要なのである。

また、表出されている言葉と解決策が違う場合もある。例えば地域住民の要望として「病院が欲しい」という思い（言葉）が発せられたとしよう。病院が欲しいという言葉をそのまま受け止めれば、その解決方法は病院を作ることになるので、病院を誘致する必要があり、病院が建たなければこの思いには応えることができない。「病院が欲しい」と言っていることを「医療サービスを受けたい」という思いと捉えたならば、病院がある地域であれば解決できるが、病院が無い地域であれば、病院までの移動すなわち送迎の課題として捉えることができる。また病院に行くことができないのであれば、往診（訪問診療）として医療機関から出向いてもらうという解決策も出てくるのである。そしてこの思い（ニーズ）は地域の事情によって変化するのである。だからこそ、それぞれの地域において思いを（ニーズ）を形にする必要があるのである。「声」を形にすることは、思いを共有することとが可能となり、共有することで解決に向けた行動が具体的にかなりやすいものとなる。

をうまく理解できない人に、「友情」「仲よし」について伝えるのは、至難の業だ。手をつないでいることが必ずしも友情の証でもないし、一緒にゲームをしたからといって仲がよいかどうかはわからない。もしも、見える事柄だけで世界を理解しようと思ったら、いま私を感じている世の中とずいぶん違ったものになるような気がする。これにまた、知的障害が加わると、知識を使って見えない情報を補うことさえ困難になる。自閉症で知的障害のある人たちが、一日に何度も混乱するのは無理もないことだ。想像することには限界があるけれど、ときどき彼らのおかれた状況を想像するようにしている。ちょっと想像すると、それだけで不安な気分になる。

でも、もしかするとその不安は、「見えないもの」が「ある」と信じている人たちの中で生きるから大きくなるのかもしれない、とも思う。もしも、私の隣にいる人が私には見えないものが見えるとしたら、私はとても不安になる。自閉症の人たちからすると、「見えないもの」を使いこなす私たちの存在は、とても奇妙なもので、そういう人たちの中で生きていることが苦勞の一因なのかもしれない。だとすると、とても気の毒な気分になる。どちらが正しいのでも間違いでもない。自閉症ではない私には「見えないもの」もあるように感じるけれど、自閉症のあなたには「見えないもの」はあるように感じられない。どちらが正しいのでも、間違いという違いがあるだけなのだ。そして、さらに違いがあるとすれば、自閉症のあなたには、「世の中には『見えないもの』でもあるように感じる人」と『見えないもの』はあると感じられない人』の両方がいる」ということがわかりにくくても（全員を一度に見ることができないので）、自閉症でない私には（全員を一度に見なくても）、「世の中にはいろいろな人がいる」ということを理解することがそんなに難しくないといいることがある。つまりそれは、多数派の中で

少数派の人が生きにくさを感じて困っているということを見えなくても理解できるということだ。なんと、すばらしいことか！

見えなくても理解できる特殊能力をもつ奇跡的な多数派の一人として生まれた以上、せめて、生きにくさを感じる少数派のことを思いやる人として生きていきたい、と思う。

※この原稿は、Juntos (フントス) CLC 発行の情報誌からの転載です。著者と発行者承諾のもと転載しています。

大友愛美 (おおともよしみ)

北海道生まれ北海道育ち、生粋の道産子です。大学卒業後、最初の福祉現場、知的障害者人所施設では地域と施設をつなぐコミュニティワーカーのような仕事をし、その後は地域で生きる人たちを支える仕事をしました。どちらの現場でも自閉症の人たちとの出会いが多く、たくさん悩み、たくさん学びました。

最近では、共生社会の実現を目指すNPO法人での仕事や、福祉の担い手を育てる場（学校や研修）での仕事をしつつ、自閉症など地域で生きにくい状況を抱えた人たちの相談や支援の仕事もしています。他の多くの人と違っていても排除しない、されない社会の構成員になるためには、学ぶだけでなく、いろいろな人と一緒に暮らす練習が必要なのかもしれない…。と感じている今日この頃です。

フリーダイヤル つなぐ ささえる
0120-279-338
よりよいホットライン

24時間通話料無料

心の悩み
学校の悩み
子育ての悩み
法律の悩み
人間関係の悩み
住居の悩み
外国人住居の悩み
DV・性暴力の悩み
仕事の悩み
セラピーやケアの悩み
自殺リスク
当事者の悩み
介護の悩み

CLICK!

起業・就労・支援の間で…（最終回）

「もしもあなたが失敗を許されなかったら、どうですか？」

（コミュニティワークス 理事長 筒井啓介）

海外に「Dignity of risk（ディグニティ・オブ・リスク）」という言葉があります。日本語に訳すと「リスクを負う尊厳」ということでしょうか。ちよつと難しい言葉ですが、簡単に言うと「誰にでも失敗する尊厳や権利がある」という内容です。

みなさんは、自分が成長したと感じるとき、過去のどのような場面を思い浮かべますか？多くの人は、大変だったり、苦しかったり、失敗してもまたチャレンジしたり…といったことを思い出すのではないのでしょうか。あとから振り返ってみると、あの時の辛い経験や失敗があったからこそ、自分は成長できたんだ！と思う方は多いはずです。

す。障がい特性やご本人の個性も考え、立ち直れないくらいのお大きな失敗は事前に避ける必要がありますが、失敗をして成長できるようにサポートすること、そしてその環境を提供することは、支援職として、とても大切なことです。

「Dignity of risk」は、障がいのある子どもへの親に対して向けられた言葉ですが、私たち支援職に向けられた言葉でもあり、思っているので、その一部を紹介します。（以下、参照）

これを読んで、皆さんはどう感じましたでしょうか。私も含めて、はつと気づかされる方もいらっしゃるのではなからいと思います。

失敗が人を成長させることがあると、頭では分かっているけど、障がいがあるという理由から、つい先回りして、失敗しないように過度に守っていることはありません

Dignity of risk

What if you never got to make a mistake?

もし、あなたが失敗を許されなかったら、どうですか？

What if your money was always kept in an envelope where you couldn't get it?

もし、あなたのお金がいづも封筒に入れられて、手の届かない場所に置かれていたら、どうですか？

What if you were never given a chance to do well at something?

もし、あなたが何かをうまくやる機会をまったく与えられなかったら、どうですか？

What if you were always treated like a child?

もし、あなたがいつも子どものように扱われたら、どうですか？

What if the job you did was not useful?

もし、あなたが役に立たない仕事をしていたら、どうですか？

What if you worked and got paid \$.46 an hour?

もし、あなたの時給が46セントだったら、どうですか？

（日本の場合、あなたが働いて1か月13,000円の給料だったら、どうですか？）

What if you grew old and never knew adulthood?

もし、あなたが年をとっても、成人期（大人になったらできること）をまったく経験できなかったら、どうですか？

-the organization "Parent Advocacy"

-Linda J. Stengle, Laying Community Foundations for Your Child with a Disability

か？正直なところ、私自身も全くないとは言い切れません。

失敗し成長する機会は、どの人にも等しく保障されなければなりませんし、何かに挑戦する機会はすべての人が持つ権利です。何かに挑戦したいと思えるような環境をたくさんつくること、そして、その挑戦をサポートできるようにすること、これこそが、福祉職の専門性だと私は思っています。今回は自戒の意味も込めて「Dig-nity of risk」を紹介しました。

最後になりますが、この3月号をもって私の担当枠が最終回となります。昨年の4月から担当させて頂いたので、ちょうど丸1年で頂いたので、ちょうど丸1年で。どれだけ皆さんのお役に立てたかは分かりませんが、私にとっても自分の考えを改めて整理するいい機会だったと感謝しています。1年間お付き合いいただき、ありがとうございます。

Information 福祉・介護・まちづくり等のイベント情報欄

3月10日までに、編集部へ届いた情報です。詳細は、各情報の連絡先にお問い合わせください。また、情報欄への掲載を希望する方は、編集部までご連絡ください。

《第22回 街CAFE さくら》

【4月の催し物】

「映画鑑賞」

日時：2017年4月16日（日）

13:00～16:00

会場：東金市東金 1060-6

(SUNFLOWER 1F内)

参加費：100円（お茶代）

問い合わせ先：社会福祉法人ゆりの木会内

認知症カフェ担当 平賀・笠原 (0475-50-8111)

《穂垂るの会》

介護している方々が集まって日々の苦労話等を気軽に本音で話し合う会です。

日時：2017年4月13日（木）

13:30～15:30

会場：ふれあいセンター 2階 創作室

経費：200円（昼食代）

主催・連絡先：穂垂るの会・井上

(090-7171-1701)

< hanahaco 上映会「ザ・トゥルー・コスト」出張寺シネマ Vol.2 >

華やかなファッション業界の裏側～知られざる真実とは？

Natural Cafe+Shop hanahaco で行う出張寺シネマ Vol.2。

今回の上映タイトルは「ザ・トゥルー・コスト」。ファッション業界でも大量生産・大量消費が問題化。誰かの犠牲の上に成り立つファッションに変化が起き始めた！トレンドはエシカル&フェアトレード・ファッション。

ファッション産業の今と、向かうべき未来を描き出すドキュメンタリー。

上映後には蓮久寺住職 江口さんの一口説法も聞けます。hanahaco のライフスタイルショップで取り扱うフェアトレードアパレルの製造秘話もご紹介予定。

・日時：2017年4月9日（日）第1回目：14:00～16:00、第2回目：17:00～19:00

・場所：Natural Cafe+Shop hanahaco（木更津市矢那 1879-1）

・参加費：1000円（ドリンク付き）

・定員：各回20名

・申込：電話（0438-38-4368）かメール（info@npo-cw.net）にてお願いします。

ドコモ市民活動団体助成事業

【助成対象活動】

1. 子どもの健全な育成を支援する活動

- ①不登校・ひきこもりの子どもや保護者に対する精神的・物理的な支援、復学、社会的自立支援活動（フリースクール、カウンセリング等）
- ②児童虐待やドメスティック・バイオレンス（DV）、性暴力などの被害児童・生徒や社会的養護を必要とする子どもの支援、及び虐待防止啓発活動。
- ③非行や犯罪から子どもを守り、立ち直りを支援する活動。
- ④子どもの居場所づくり（安心・安全な居場所の提供・子どもの不安や悩みに対する相談活動等）
- ⑤障がい（身体障がい・発達障がい等）のある子どもや難病の子どもの支援活動（療育活動、保護者のピアサポート活動等）
- ⑥マイノリティ（外国にルーツを持つ、LGBT等）の子どもの支援する活動。
- ⑦地震・台風などの自然災害で被災した子どもを支援する活動。
- ⑧上記①～⑦以外で「子どもの健全な育成」目的とした活動。

2. 経済的困難を抱える子どもを支援する活動

- ①学習支援活動放課後学習サポート、訪問学習支援、学習能力に合わせた個別ケア等。
- ②生活支援活動子育てサロン、子ども食堂、ひとり親家庭料理教室、フードバンク、居場所の提供等。
- ③就労支援活動職業体験、社会的養護退所者の就労支援等
- ④上記①～③以外で「経済的困難を抱える子どもの支援」を目的とした活動。

【助成額】

- ①子どもの健全な育成を支援する活動助成額：50～100万円／1件 総額：2,500万円
- ②経済的困難を抱える子どもを支援する活動助成額：100万円／1件 総額：1,000万円

【助成期間】

平成29年9月1日～平成30年8月31日

【応募締め切り】

平成29年3月31日

【お問い合わせ先】

NPO法人モバイル・コミュニケーション・ファンド

〒100-6150 東京都千代田区永田町2-11-1 山王パークタワー41階 TEL：03-3509-7651

サポート会員募集

「ふれーず」の編集・発行を応援いただけるサポート会員を募集します。

応援いただける方は、ぜひ、ご連絡ください。

【内容】

会費：1口3,000円（※個人・団体）

期間：年度単位

【連絡先】

特定非営利活動法人ちば地域生活支援舎
総務・企画課（0475-53-3630）



<表紙画 amor amigo さんの紹介>

イスラエルに縁ある夫、ペルーに住んでいた妻、17歳差の夫婦ユニット。山口県萩市で私たちが娘と暮らすのは、毛利の殿様が参勤交代で通ったお成り道に面した築200年の古民家です。そこで、イラスト業と並行しつつ、祖父から注いだ画材屋、重厚な梁が残る古民家BAR、ピタサンド専門店、アート教室などを営んでいます。

発行元：ふれーず編集部
千葉県東金市東金425-2（鶴嶺の家内）
TEL：0475-53-3630

編集責任者：宮下・太齋

発行部数：500部

怒涛の平成28年度がもう少しで終わる…ほっとする半面、さらに激しい平成29年度が、すぐそこに控えている。いつになったらこの循環から抜け出せるか？そもそも、抜け出せるものなのか？結局自分次第なんだろうな～（To）